

# サンタマリアを慕ふ (一)

## 三 好 政

「サンタマリアに歸るつて? サンタマリアはあよしなさいよ。彼處は加州の中でも一番悪いところですよ、物凄い排斥だといふじやありませんか」

これは私の親友の忠言である。「ナーニ、排斥が何だ鬼でも来い。どんな苦痛も押しきつてやつて見せる」といふ様な斷乎たる信念も、隠忍自重も覺束ないが、彼處には私の三つの墓

がある。数々の希望を果し得ずして逝きし兄と母との靈はガダルビ墓地の空を往來して私を差し招く。

今の處サンタマリアには日本人は一人もゐない。語るに友なき排斥の本場に歸ることは悲しく淋しいけれども、犬と猫とチキンを飼つて無理やりに日本語で話そう。涙の遺場に困つた時は墓場で泣き明かそう。そ

して今は去りゆきしサンタマリア平原の誰彼が、昔戀しくサンタマリアの土地を訪ふことも必ずあるだらうその時、一杯の茶づけを振舞するかまへもしたい……まあ、こうした消極的な、ささやかな希望を老骨の杖としてサンタマリアに歸ることになりました。

曾ては其繁榮同胞社會中隨一と言はれたサンタマリア平原を、排斥の風評を聞いた位でアツサリと捨て、いゝものか! 勿論我等は無力、其上老と病に蝕まれし身をもつて何等爲すべき

目算なくとも、サンタマリア平原地下に眠る先亡三百の靈が忍苦三十年孜々として民族の發展に奮勵せる其功に答ふるため一小燈をかざし守りて、日本人の足跡を絶やしめざらんことを念ずるのみ。

一九二〇年加州外人土地方が制完せられて最も打撃の甚だしかつたのもサンタマリアである。あの當時ユニオン製糖會社が一斉に日本人のリースを剝奪した爲め、數万佛に上る農具、こ

とに數十頭の愛馬の所置に迷ひ、居るに居られず、去るに去られず、進退谷まつて土に塵して祈つた農業家は一人や二人ではなかつた機を視るに敏なる數氏はメキシコ、ユタ、ベスカデロ地方に企業したのであるが、茫然たる人々の上には何時しか春風の訪れがあり數千英加の野菜畑に蘇生したのであつた。またしても此度の厄にあひ、今や加州歸還は許されながら、デリナリと足もどから煙したてられる排斥の焰に誰一人ふり向く者もない土地と變つてしまつたのである。

